

可算和定理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2014年9月27日

命題「可算個の可算集合の和集合は可算集合」を可算和定理という。可算和定理は選択公理が無ければ証明できない。

命題. 選択公理 \implies 可算和定理

証明. $\{X_n\}_{n=0}^{\infty}$ を可算集合の族とする。簡単のため、各 X_n は可算無限集合で、 $n \neq m$ ならば $X_n \cap X_m = \emptyset$ であるとする。 X_n が可算無限だから、 $A_n := \{f: \mathbb{N} \rightarrow X_n \mid f \text{ は全単射}\} \neq \emptyset$ である。よって選択公理により $(f_n)_{n=0}^{\infty} \in \prod_{n=0}^{\infty} A_n$ を取ることができる。これを使って $f: \mathbb{N} \times \mathbb{N} \rightarrow \bigcup_{n=0}^{\infty} X_n$ を $f(n, k) := f_n(k)$ で定めれば、 f は全単射である。 \square

定理. 「 $\mathbb{R} = \bigcup_{n=0}^{\infty} X_n$, $|X_n| = \aleph_0$ とは書けない」は ZF で証明できない。

証明. M を ZFC + GCH の可算推移的モデルとする。以下を満たす関数 p 全体がなす集合を \mathbb{P} とする。

- $\text{dom}(p) \subset \omega \times \omega$, $|\text{dom}(p)| < \infty$
- $\langle n, i \rangle \in \text{dom}(p)$ に対して $p(n, i) \in (\omega_n)^M$.

\mathbb{P} に順序を $\leq := \supset$ で入れる。

$G := \text{Aut}(\omega)^\omega$ として、 $g = (g_k)_{k \in \omega} \in G$, $p \in \mathbb{P}$ に対して $g(p) := \{\langle n, g_n(i), \alpha \rangle \mid \langle n, i, \alpha \rangle \in p\}$ と定める。 $n \in \omega$ に対して $H_n := \{g = (g_k)_{k \in \omega} \in G \mid k < n \text{ に対して } g_k = \text{id}\}$ と定める。 $\mathcal{F} := \{H \subset G \mid H \text{ は部分群, ある } n \in \omega \text{ が存在して } H_n \subset H\}$ とする。 \mathcal{F} は normal フィルターであることが容易に分かる。

M 上 \mathbb{P} ジェネリックな \mathcal{G} を取り, \mathcal{F} から定まる symmetric モデル $N \subset M[\mathcal{G}]$ を取る. $B_m := \{p \in \mathbb{P} \mid \text{dom}(p) \subset m \times \omega\}$ と定める. $p \in B_m, g \in H_m$ に対して $g(p) = p$ である.

$n \in \omega$ に対して

$$\begin{aligned}\Sigma_n &:= \{\sigma \in M^{\mathbb{P}} \mid \text{dom}(\sigma) \subset \check{\omega}, \text{ran}(\sigma) \subset B_n\} \\ \underline{R}_n &:= \{\langle \sigma, \mathbf{1} \rangle \mid \sigma \in \Sigma_n\} \\ \underline{X} &:= \{\langle \underline{R}_n, \mathbf{1} \rangle \mid n \in \omega\}\end{aligned}$$

とおく. $\underline{R}_n, \underline{X}$ は \mathbb{P} -名前である. $g \in G, \sigma \in \Sigma_n$ とする. $p \in B_n$ ならば $g(p) \in B_n$ だから, $g(\sigma) = \{\langle \check{m}, g(p) \rangle \mid \langle \check{m}, p \rangle \in \sigma\} \in \Sigma_n$ である. よって任意の $g \in G$ に対して $g(\underline{R}_n) = \underline{R}_n$, 即ち $\text{sym}(\underline{R}_n) = G$ となる. 明らかに $\text{dom}(\underline{R}_n) \subset \text{HS}$ だから, $\underline{R}_n \in \text{HS}$ である. 故に $\underline{X} \in \text{HS}$ も分かる.

$R_n := \text{val}(\underline{R}_n, \mathcal{G}), X := \text{val}(\underline{X}, \mathcal{G}) = \{R_n \mid n \in \omega\}$ と置く. $X \in N$ である. 故に $\bigcup X = \bigcup_{n=0}^{\infty} R_n \in N$ となる. 任意の実数 (即ち, ω の部分集合) $x \in N$ を取る. $\text{val}(\underline{x}, \mathcal{G}) = x$ を満たす \mathbb{P} -名前 $\underline{x} \in \text{HS}$ を取る. $\text{dom}(\underline{x}) \subset \check{\omega}$ としてよい. $\underline{x} \in \text{HS}$ だから, ある $n \in \omega$ が存在して $H_n \subset \text{sym}(\underline{x})$ となる. よって, $\text{ran}(\underline{x}) \subset B_n$ でなければならない. 従って $\underline{x} \in \Sigma_n$ となり, $x = \text{val}(\underline{x}, \mathcal{G}) \in R_n$ が分かる. 以上により, $(2^\omega)^N \subset \bigcup_{n=0}^{\infty} R_n$ である.

よって, 各 R_n が N で可算であることを示せばよい. 定義より, M の中で $|\Sigma_n| = |\mathcal{P}(\omega \times B_n)| = (2^{\omega_n})^M = (\omega_{n+1})^M$ である (M で GCH が成立することに注意する). よって $\Sigma_n = \{s_\alpha \mid \alpha \in (\omega_{n+1})^M\}$ と書ける. $\underline{h} := \{\text{op}(\check{\alpha}, s_\alpha) \mid \alpha \in (\omega_{n+1})^M\}$ と置けば $h := \text{val}(\underline{h}, \mathcal{G}) = \{\langle \alpha, \text{val}(s_\alpha, \mathcal{G}) \rangle \mid \alpha \in (\omega_{n+1})^M\}$ は全単射 $h: (\omega_{n+1})^M \rightarrow R_n$ となる. 即ち, N の中で $|R_n| = |(\omega_{n+1})^M|$ である.

$n \in \omega$ を取る.

$$\underline{f}_n := \{\langle \text{op}(\check{i}, \check{\alpha}), p \rangle \mid i \in \omega, p \in \mathbb{P}, p(n, i) = \alpha\} \in M^{\mathbb{P}}$$

とする. $g = (g_k)_{k \in \omega} \in H_{n+1}$ に対して

$$\begin{aligned}g(\underline{f}_n) &= \{\langle \text{op}(\check{i}, \check{\alpha}), g(p) \rangle \mid i \in \omega, p \in \mathbb{P}, p(n, i) = \alpha\} \\ &= \{\langle \text{op}(\check{i}, \check{\alpha}), p \rangle \mid i \in \omega, p \in \mathbb{P}, g^{-1}(p)(n, i) = \alpha\} \\ &= \{\langle \text{op}(\check{i}, \check{\alpha}), p \rangle \mid i \in \omega, p \in \mathbb{P}, p(n, g_n(i)) = \alpha\} \\ &= \{\langle \text{op}(\check{i}, \check{\alpha}), p \rangle \mid i \in \omega, p \in \mathbb{P}, p(n, i) = \alpha\} \\ &= \underline{f}_n\end{aligned}$$

だから $\underline{f}_n \in \text{HS}$ である. $f_n := \text{val}(\underline{f}_n, \mathcal{G}) \in N$ とすれば f_n は ω から $(\omega_n)^M$ への全射である.

\therefore) 任意の $\alpha \in (\omega_n)^M$ を取る. $D := \{p \in \mathbb{P} \mid \text{ある } i \in \omega \text{ が存在して } p(n, i) = \alpha\}$ と置けば $D \subset \mathbb{P}$ は稠密である. \mathcal{G} が M 上 \mathbb{P} -ジェネリックだから $p \in D \cap \mathcal{G}$ が取れる. このとき $p(n, i) = \alpha$ とすれば $f_n(i) = \alpha$ である.

故に N において $|R_n| = |(\omega_n)^M| = \omega$ である. □

系. 可算和定理は ZF で証明できない. □

系. Lebesgue 測度の完全加法性は ZF で証明できない. □